

沖縄歴史の散歩道

石碑を巡る②

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



山川の石敢當(鹿児島県指宿市)

沖縄の石碑で多くの人たちになじみのあるのが「石敢當(当)」です。T字の突き当りに設置された中国伝来の魔除けの石碑で、現在では沖縄各地の、大きな道路から小さな路地などいたるところに見ることがができます。「石、敢えて當たる」と石に呪力を表したものとされ、また民間伝承では中国の人物名とも言われています。

この石敢當、最古のものはどこにあるかという点、実は久米島に存在しています。久米町字西銘、旧上江洲家住宅の近くにあり、石敢當は石碑のかたちで小高い丘に立っています。「泰山石敢當」と刻まれた文字とともに雍正11年(1733年)の銘があり、年号が



読谷村渡具知の梵字碑

書かれています。中国の風習である石敢當が沖縄各地に広まったのは、18世紀以降、風水思想によって集落改変をおこなった久米村の人々の指導と考えられ、実際に集落内に石敢當を建てるよう指導した記録も残っています。

ちなみにこの石敢當、数は少ないものの日本全国に分布していて、とくに琉球との交流が深かった鹿児島県の山川(指宿市)などに多く見られるのも興味深いところです。現地では「セツカントウ」と呼び、その形は将棋の駒のようです。

また現在ではあまり認知されていないものの、梵字碑も琉球の時



豊見城市字豊見城の泰山石敢當

上里 隆史

(うへざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポニーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。



代に各地に建立されました。梵字とは古代インドのサンスクリット文字で仏教とともに伝えられ、真言が石碑に刻まれました。たとえば読谷村渡具知にある梵字碑は梵字で大日如来の真言で「アビラウケン」と刻まれています。多良間島の寺山と呼ばれる林にも梵字碑があります。1701年に建立されたもので、那覇の護国寺住持だった心海上人が修行のため多良間島に渡海し、この地に梵字碑を建てたと言います。

面白いところでは、豊見城市字豊見城の泰山石敢當は、その文字の上に「ウン」という梵字が刻まれており、これは一切の障害を降伏させ、破るという意味合いがあります。つまり石敢當の威力を梵字によってさらに強化する意図があったとみられます。